

〈古典的美学〉(佐々木健一「芸術の基底」)か、非古典的美学〈関係性の美学〉(渡辺裕「音楽における意図と意味」)か
- 芸術作品の解釈を可能とする基底をめぐって -

15

●1 なぜ、佐々木健一「芸術の基底 - 制作学から解釈学への回帰」(1982)を読むか?

渡辺裕「音楽の意図と意味」は、なぜ芸術作品が意味を伝えるかを論じ、その基底には「作者の意図」があるとする一方、佐々木は、その基底に「作品の本質」(p.14)があるという。では佐々木のいう「作品の本質」とはなにか?、またなぜそれが意味を伝える基底となるのか? を知りたくなる。これらを知るために論旨を辿ることにした(本講義 第14回、15回)。

●2 佐々木「芸術の基底」と、渡辺「音楽における意図と意味」との議論の目的の違い

「『芸術の基底』を出発点として、私(※佐々木)今、『作品の哲学』という小著を計画しているが、(略) その論考は哲学的もしくは人間学的なものであって、渡辺氏が問題としているような解釈理論のレベルのものではない」(佐々木「批判を駁す」p.115)

●3 佐々木「芸術の基底」(1982)の論旨(渡辺と同じ「解釈理論のレベル」で読むならば、)

- 人が作品を作るといふこと、それは、そもそも、世界を理解しようとする人間の本来的な精神性向による(p.27, 第6節)。
- 世界 = 自然にはこの世の真理があり、自然の真理は有機的で無駄のない自律的構成をもっている。そして優れた芸術作品は自然に近く。
- なぜなら、アリストテレスによれば〈芸術とは世界のミメシス(模倣)である〉から。なので芸術は実践(日常会話)とは区別される。
- 佐々木による「作品の本質」とは = 「人によって作られながらも可能ながぎり自立した(即ち自然的な)意味的実体」のこと(p.27, 上左)。
- つまり、芸術作品の本質を踏まえた解釈を試みる全ての者が共有する文脈には、〈自然の中に現れた真理〉の理解への希求がある。
- したがって、〈自然に現れた真理〉の探求において、芸術作品の解釈は、一つの正しい解釈へと収斂する可能性がある。
- このように、芸術作品が意味を伝える基底には、「作品の本質」があり、それを踏まえて解釈をおこなえば、最後にこの世の真理に通づるといふ意味で、相対性を免れる(一つの正しい解釈に至る)可能性がある、と佐々木は考えているように思う。

補足1: アリストテレス「第四章 詩作の起源とその発展について」、『詩学』、松本仁助・岡道男訳、岩波文庫。

一般に二つの原因が詩作を生み、しかもその原因のいずれもが人間の本性に根ざしているように思われる。

(1) まず、再現(模倣、※ = ミメシス)することは、子供のころから人間にそなわった自然な傾向である。しかも人間は、もっとも再現を好み再現によって最初にものを学ぶという点で、他の動物と異なる。

(2) つぎに、すべての者が再現されたものをよるこぶことも、人間にそなわった自然な傾向である。(略) その理由は、学ぶことが哲学者にとってのみならず、他の人々にとっても同じように最大のたのしみであるということにある(アリストテレス、pp.27-28)。

補足2: goo辞書「ミメシス【(ギリシャ)mimēsis】の解説」(※わかりやすい記述をあげるなら、、、)

「芸術理論上の基本的概念の一。(略)模倣は人間の本来の性情から生ずるものであり、諸芸術は模倣の様式である、とするアリストテレスの説が源にある。」 <https://dictionary.goo.ne.jp/word/ミメシス/>

● 4 渡辺「音楽における意図と意味」(1983)の論旨

- a. 議論の前提とするのは、藝術を言語的コミュニケーションと捉える視点。ここに当時新奇性があった。
- b. また、私たちは、ある作品に対して、あくまで「作者による作品」と捉えるという経験的事実に基づいた視点。
- c. つまりミメシス、アイデア論、实在論、作品が自然に近く、等の古典的美学の視点ではない。するとどのような結論ができるかという試み。
- d. 藝術を言語的コミュニケーションとすると、スペルベルらの「関与度の公理」を適用して論ずることができる。
- e. ここから「芸術作品の場合、(略) 関与度の大小を何を尺度にして測定するのか」という問題が立てられる(p.93)。
- f. 渡辺はその尺度に、「作者の意図」をおく。特に、一般的意図(協力の原理)の前提となる個別的意図の存在を重視する。
- g. 鑑賞者が解釈を試みる対象は、作者が考えていたと思われる「個別的意図」である。
- h. 鑑賞者は、作品を有機的構成をもった統一的世界であると信じることに基づいて、より関与度の高い解釈を希求する(正しい解釈)。
- i. しかし、「つねに誤解の可能性」があるゆえに、解釈された「個別的意図」は、現実の作者の意図と合致するとは限らない。
- j. ここで、解釈の多様性を主張するならば、それが「作者による作品」と捉える経験的事実と矛盾する。ここから渡辺は仮説する。
- k. 事実としての作者の個別的意図でなかったとしても、鑑賞者はその解釈を、いわば「作者による無意識の個別的意図」として認識する。

● 5. 佐々木 語録

- ・「人間精神の本質」=「すべてを理解しようとする」こと(p.27, 上中)。「今まで見つけることのできなかった関係を発見しようとする」こと(p.28, 下中)。ただし「その理解のために対象の『まとまり』が必要」(p.27, 上中)
- ・「関与性」=「関与性とは作品のすべての要素に意味があるということ」。そしてそれは「すべてを理解しようとする」(※人間の先天的な)精神の性向と照応する」
- ・「関与性の公理」=「(※人間の先天的な)精神と作品の相関性に立脚している」もの。p.28(下左)。
- ・「関与性の公理もまた、人間精神の本質に支えられて、はじめて公理なのである」p.27(上左)。佐々木の語用論。
- ・「作品の本質」=「人によって作られながらも可能なかぎり自立した(即ち自然的な)意味的実体、ということ」p.27(上左)。

● 6. 後期レポート執筆のために (「作者の意図と解釈」、「批評理論」などを考えるための様々な視点)

□ さまざまな 批評理論を広く知る

- ・ T. イーグルトン『新版 文学とは何か：現代批評理論への招待』大橋洋一訳、岩波書店、1983=1997年。
- ・ 筒井康隆『文学部唯野教授』岩波書店、1990年。
- ・ 廣野由美子『批評理論入門：「フランケンシュタイン」解剖講義』、中公新書、2005年。

□ 文献ガイド

- ・ 森巧次「分析美学を学ぶ人のために：邦語文献リーディングリスト」(accessed January 15, 2020,)。web資料。「2019年度の慶應義塾大学での授業向けに作成した分析美学の邦語文献リーディングリスト」とのこと。特に「6. 作者の意図と解釈」、「11. 作品の表出性」を参照のこと。
https://researchmap.jp/mugefrbz1-1833297/?action=multidatabase_action_main_filedownload&download_flag=1&upload_id=296872&metadata_id=64159

□ その他 キーワード

- ・ ロラン・バルト「作者の死」、「作品からテキストへ」。
- ・ ルイ・アルチュセール「国家のイデオロギー装置」。
- ・ 「ニュークリティシズム (新批評)」。
- ・ 印象批評。
- ・ マルクス主義文化批評。
- ・ W. イーザー「想定された作者」。
- ・ カルチュラル・スタディーズ。
- ・ プラトン「アイデア論」。
- ・ アリストテレス「ミメシス」。
- ・ 構築主義。
- ・ ミシェル・フーコー。